神奈川県立多摩高等学校　第６５回卒業式

校長式辞

神奈川県立多摩高等学校第６５回卒業式を挙行するにあたり、ご挨拶申し上げます。

保護者の皆様、本日は誠におめでとうございます。担任の呼名に凛として立つ我が子の姿をご覧になり、感慨もひとしおかと存じます。心よりお喜び申し上げます。これまで、多大なご支援・ご協力を賜りましたことを、全職員になり代わりまして、厚くお礼申し上げます。

また、日ごろ、本校の教育活動にご理解とご支援を賜っております、同窓会、ＰＴＡ、地域ほか、関係の皆様に、この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。

６５期の皆さん、今ここに多摩高生としての卒業の時を迎えました。皆さんは、高校の教育課程を修了し、更に４月からは社会的にも成人として自立します。これからの２１世紀を生き、２２世紀への架け橋である皆さんにお願いがあります。皆さんは、未成年者として保護され、与えられてきた立場から、これからは成人として、社会を創り、責任を持って次世代に繋ぐ立場になります。２２世紀の世界の構築に、どうか責任と自信をもって行動してください。未来は皆さんの一人ひとりの判断や行動にかかっています。

「バタフライエフェクト」という言葉があります。気象学者のエドワード・ローレンツ氏が１９７２年にアメリカ科学振興協会で行った講演で、この概念を発表しました。この時の講演の題名の「ブラジルでの蝶の羽ばたきはテキサスでトルネードを引き起こすか」からとられた言葉です。主旨は、「どんなに初期の差が小さくても様々な要因によって変化は進み、どのような結果や未来が訪れるかは誰にも判らない。変化の可能性は、どんなに計測精度を上げても予測は出来ない。大局の動向をどう捉えるかの方が重要である」というものです。そこから、「非常に小さな出来事が、さまざまな要因を引き起こした後、非常に大きな事象の引金に繋がることがある」というように使われています。

皆さん一人ひとりの未来も、確定されたものではなく、皆さんの小さなひらめきや発見、小さな行動の変化、その一つひとつによって変わっていくものです。そして、一人ひとりの行動は、自分自身も含め、世界をも変えられる力、可能性を持っています。

グローバル化が進み、多様な価値観があり、組織や制度も流動的な社会となっています。答は一つではない、不確実性の時代と言われます。

個人の将来も、世界の未来も、何一つ確定したものはありません。多摩高校の多くの生徒は卒業後に上級教育機関で学びます。そこで学ぶことや学問の専門は固定したものではありません。学問の世界でも分野の融合が進んでいます。学びを固定せず、変化に順応し、変化を起こす意気込みで学んでください。また、社会に出て全く別の分野で学びを深める人もいるでしょう。18 才の時の判断や決定、行動はこれからの長い人生の中で何度も行う判断や決定の一つに過ぎません。この先も状況に応じて、怖れずに意識や行動の変革を重ねてください。その判断、決定、行動の積み重ねによる影響が後には大きな、大きな違いを生みます。

「やっても変わらないだろうから何もしない」ではなく、自分の将来のため、社会のために大きな潮流を生む可能性を信じて、責任と自信を持って判断し、行動してください。多摩高校で

学んだ皆さんが、世界に有用な変化をもたらすことを期待しています。

昨年、カタールで開催されたサッカーワールドカップにおいて、世界中の人々を感動させた様々なドラマがありました。中でも、日本チームの試合は世界に衝撃を与えました。日本は強豪国ではありません。その日本が優勝経験のある強豪国のドイツやスペインに勝つことは難しいだろうと世界の多くの人が予想していました。しかし、日本は世界の大方の人間が予想していた結果を覆しました。理由は一つではないでしょう。しかし、日本チームの全員が「結果は決まっていない」という強い思い、自分や仲間のこれまでの努力を信じる力、意思や行動が起こす変化や可能性を信じる力を持ったこと。この力が強く大きかったことが勝利の要因であったように思います。

個人の将来も、日本の、そして世界のこれからも何一つ決まっていることはありません。「バタフライエフェクト」まさしく一人の一歩が、波紋を広げ、未来を作っていく。その一人ひとりである皆さんのこれからの活躍を期待して卒業式の言葉といたします。

卒業おめでとうございます。

令和５年３月８日

神奈川県立多摩高等学校長　　野田　麻由美